

### 情緒反応

解熱により機嫌、食欲、睡眠などの情緒反応の改善を認める例は多く、悪化する例はなかった。

### 副作用

副作用らしいものは認めなかった。

## 20. 小児の発熱の処置について

安次嶺 馨（沖縄県立中部病院小児科）

### 1. 目的

外来を訪れる小児の主訴として、最も多いものは発熱である。特に救急外来においては内科的疾患の大多数は発熱である。これら発熱の多くはウイルス性の上気道感染である。発熱に対する処置として、私達の救急室では解熱剤の投与、アルコールあるいはぬるま湯によるスポンジバス等を行なっている。発熱に対する最も有効な処置は、解熱剤とアルコールによるスポンジバスの併用であると報告されている。スポンジバスについては、わが国では従来あまり用いられず、またその施行に際しても、家族からかなりの低抗がある。私達は、これらの解熱方法の有効性を確かめる意味で、本研究を行った。

### 2. 対象

沖縄県立中部病院救急室を訪れた小児発熱患者で、年齢3か月から3才までを対象とした。体温は直腸で測定し、39℃以上の発熱のある者に限った。調査期間は、昭和54年8月～9月で、救急室は冷房が施されており、室温はおよそ23℃～27℃であった。

### 3. 方法

解熱剤としてアセトアミノフェンを10 mg/kg投与し、20分毎に2時間体温を測定した。スポンジバスは消毒用アルコール1/2希釈液を用い、まんべんなく体を拭き、20分毎に2時間、直腸体温を測定した。また、解熱剤とスポンジの併用を行なった。

#### 4. 結果

##### ① アセトアミノフェンを投与した群

8例の平均体温は39.4℃である。アセトアミノフェン投与後、38℃以下に解熱したものは6例あった。38℃以下になった時間の経過をみると、40分2例、60分1例、100分2例、120分1例であった。38℃まで下らなかった2例は、それぞれ38.2℃、38.5℃まで下降していた。

##### ② アルコールによるスポンジバスを施行した群

10例の平均体温は39.30℃であった。38℃以下に下ったのは2例のみであった。いずれも60分以内に下降した。6例はスポンジバス施行中、悪感あるいは四肢末端のチアノーゼがあり、一時スポンジを中止せざるをえなかった。

##### ③ アセトアミノフェンとアルコールによるスポンジを併用したもの

2例の体温は40.4℃、39.7℃であり、80分後にはいずれも38℃に下降していた。

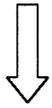
#### 5. 考案、まとめ

発熱に対する処置として、アセトアミノフェン、スポンジ（ぬるま湯、冷水、あるいはアルコールによる）等の方法があり、それぞれ単独に、あるいは併用により効果を上げることが出来る。今回、私達が少数例に行った方法は、アセトアミノフェン単独使用、アルコールによるスポンジ、および両者の併用である。アセトアミノフェンは解熱剤として有効である。その効果は40分頃からみられ、2時間では、十分な効果が期待できる。一方、アルコールによるスポンジは、アセトアミノフェン投与群に比して、解熱効果が劣り、しかも、悪感、などの副作用があり、これが解熱を妨げているとも考えられる。アセトアミノフェンとアルコールスポンジの併用を行った2例は著効があり、おそらく最も効果のある方法であろう。

今後、ぬるま湯によるスポンジ、およびアセトアミノフェンとの併用など、さらに数多くの症例について、解熱効果を調べてみたい。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



## 1,目的

外来を訪れる小児の主訴として、最も多いものは発熱である。特に救急外来においては内科的疾患の大多数は発熱である。これら発熱の多くはウイルス性の上気道感染である。発熱に対する処置として、私達の救急室では解熱剤の投与、アルコールあるいはぬるま湯に上るスポンジバス等を行なっている。発熱に対する最も有効な処置は、解熱剤とアルコールによるスポンジバスの併用であると報告されている。スポンジバスについては、わが国では従来あまり用いられず、またその施行に除しても、家族からかなりの低抗がある。私達は、これらの解熱方法の有効性を確かめる意味で、本研究を行った。